

メディア・スポーツに関する研究II

—記号論的研究視角とその適用—

橋本 純一

A Study on Media Sport (II); A Semiotic Perspective and its Application

Jun-ichi HASHIMOTO

The aims of this study were to; 1) present a semiotic perspective for media sport, 2) offer its methodological cognition model, 3) apply it to the media sport.

The results were mainly as follows;

- 1) The semiotic perspective of signification which Erly R. Barthes represented was presented as the fittest one, and its outline was explained.
- 2) The process which discourse is produced from syntax and rhetoric was explained and a stratified cognition model was offered.
- 3) By applying it to the media Ohzumo---professional sumo wrestling---, the several dominant values or ideologies in Japan were exposed, but there were the differences between "newspaper and television" or "voice and the field" in the degree of compulsion of signification.

I 緒言

駅の売店を見れば、その店頭はスポーツ一色であり、また、平日のゴールデンタイムや日曜日のテレビ番組からスポーツを取り去った時、その受け手やスポンサーに対する影響は計り知れない。今や、1日平均のスポーツ新聞の発行部数は約1000万部、テレビ・スポーツ放映時間は約10時間にも達しているのである。日常生活においてこのようにメディア・スポーツ経験が“非日常的”とって片付けられないほど増大している時に、その記号論的理解の必要性和可能性が問われなければならないことは先に論じた³⁾。本研究はこれを受けて実際にいかにしてそれを展開するのかという方法論的課題を解決する手がかりを提供することを目的としている。具体的には、1)メディア・スポーツ理解の為の記号論的前提及びパースペクティブの提示、2)その方法論的認識モデルの提示、さらに3)その適用である。

II 文化(メディア・スポーツ)研究のための記号論的前提

1. 記号論の輪郭

一般に、記号理論の輪郭として考慮すべきことは、代表的な理論には次の三種があるということである。

一つは、E. ビュイサンス、L. プリエートに代表される「コミュニケーションの記号論」で、これは、シグナルの解釈を目的とするものであり、その前提には固定したコードの存在がある。二番目は、初期のR. バルトに代表される「意味作用の記号論」とよばれるものである。これは、前者に比べて、かなりダイナミックな記号論で、その対象も意味作用をもつ社会、文化現象である。三番目は「意味生産の記号論」であり、これは、J. クリスティヴァに代表される。この記号論は分節された言語、表象、文化現象と、未分節のカオスとの運動過程を照射するダイナミクスを有してい

る。文化研究のための記号論としては「意味作用の記号論」と「意味生産の記号論」の二者があげられよう。「意味作用の記号論」について、丸山圭三郎は、根本的に構造主義に位置づけ、以下のように述べている。「アルチュセールのイデオロギー論における理論的実践に見られるごとく、一方においてはイデオロギーの本質的構造と働きを解明して、そこからは、『社会が存続する限り脱出できない』という拘束性を認識すると同時に、他方においては、この拘束性そのもののなかに自らの構造を突き崩し変革する反構造的契機を見出していない限り、構造分析は文字通り分析的思考の枠の中で硬直化し、構造維持もしくは構造強化の役割を果たしてしまっ、生成的思考への途はいつまでも閉ざされてしまうことであろう。」⁷⁾

しかし、下田直春は、このような思考の構造的制約について、それを否定はできないとしながらも、「しかし、人々はそのような構造的制約がリーズナブルであるかどうかを主体的に判断することができる。そこに、不合理性、不都合性、不利益性が人々の意識によって見出される時、人々は構造の変革を要求し、場合によっては、新たな構造をボランティアスティックにつくりあげて、その構造の中で行動する。」¹¹⁾と新たな構造の再編成を目論むものであるとして、構造主義の正当性を主張する。筆者は、下田の見解に依拠し、イエラムスレウやバルトに代表される構造的・記号論的方法が、メディア・スポーツ分析にとって現時点で妥当性の高いものであると考える。

2. 記号論の特性と現代的重要性

記号論的方法的特性については、星野のあげた三点が参考になる。すなわち、第一に文化科学 (Cultural Science) であり、第二に、超学的科学 (Meta-disciplinary Science) であり、第三に意味分析 (Semantic Analysis) を行うことである。第一の特性は、近代社会科学の自然科学指向……つまり量的分析……の限界から必然的相互補完的に要請される質的分析を、第二の特性は、本来境界の不明瞭な文化的社会的現象に対して全体的統合的な分析を、第三の特性は、量的には測定不能である文化的社会的現象の深層的究極的次元の意味を質的に分析を行うことができることに現代的重要性がある。

3. 記号表現 (signifiant) と記号内容 (signifie)

記号 (signe) は物質的な対象である記号表現と、意味である記号内容からなりたっている。議論は多々あるが、記号内容が「モノ」そのものでなく、「モノ」の心的表象であるという事実を強調することでは誰も意見が一致する。たとえば、ウシという語の記号内容は動物のウシそのものではなく、その心的映像である。また、バルトは、ストア学派の分析を追い、記号内容とは、意識の行為でも実在の「モノ」でもなく、記号の意味作用の内部で、ほとんどトートロジー的にしか定義できないもので、記号の使用者がそれによって了解する「何か」なのである、と機能的な定義を下している。いずれにしても、記号内容は記号表現と切り離して定義することはできない。すなわち、記号内容は「関係物」の一方に他ならず、ただひとつのちがいは、記号表現が仲介者であることである¹²⁾。つまり、記号表現には「有形素材」が必要である。すなわち、このふたつは、分析上の目的から分離されるのであり、実際には常に記号とは「モノ」プラス「意味」である¹⁴⁾。

4. 意味作用モデル

イエラムスレウによれば、すべて記号体系は「外形 (expression)」の面と「内容 (contenu)」の面とを持ち、意味作用はこの二つの面の間の関係 (relation) に相当する。それぞれを E, C, R, とすると、今、この E, C, R という体系がこんどはもうひとつの体系の単なる要素となり、第一の体系が第二の体系の中にはめこまれる場合を想定しよう。それは二つの完全に異なった形で起こり、その結果二つの対立した意味作用が生ずる¹³⁾。この「入れ子」体系は、図1のように表わせる。そして彼は A を共示 (connotation) 的記号集合と呼び、B をメタ言語 (métalangage) 的記号集合とした。さらに、バルトはソシユールの記号表現と記号内容の概念を拡大適応させて、図2のごとく意味作用の構造をモデル化した²⁾。彼も記号表現と記号内容との関係を解明することの他に、意味を重層的に捉えようとする。つまり、この意味を「外示 (denotation)」と「共示」とに分類して意味解釈を行なうのである。メディア・スポーツの意味を問う場合に、このような手法・考え方は有益であろう。

III マス・メディアのつくる記号体系

1. コミュニケーションのモデル

ここでの記号体系は、パロールの背後にあるラング(言語構造)という意味ではない。言表行為・表現行為の際に不断に創造されている記号の集積体のことである。ここでは、中野のコミュニケーションのモデル図式⁹⁾(図3)に、記号体系と媒体のつくる記号論的な構造を求め、メディア・スポーツ理解の前提としたい。(それぞれの諸要因については詳述できないので中野⁹⁾を参考にされたい。)

記号体系の形成には、これらの諸要因が関与している。では、それのもつ意味についてはどうだろうか。中野は、イエラムスレウを参考に、原存在と意図を合成したものを「素材」とし、それを形式化したものを「実質」とした彼の論を受けて、

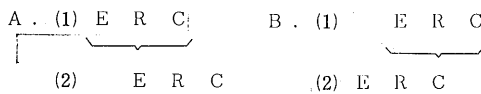


図1 イエラムスレウの入れ子体系

コノテーション	Sa	Sé
デノテーション	Sa	Sé
メタ言語	Sé	Sa

Sa=シニフィアン
Sé=シニフィエ

図2 バルトの意味作用の構造モデル

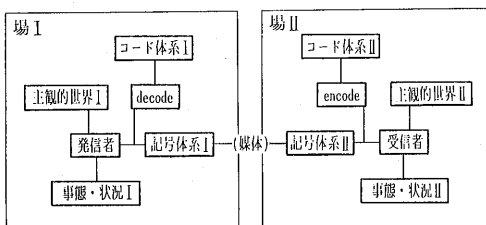


図3 中野のコミュニケーション・モデル

「素材」は客観的世界についての混沌であり、「実質」は、それを構造化したものである。したがって、「実質」は「素材」の縮図であり、記号や媒体とそれとの結合の多元性は、ひとつの素材に複数の「実質」の存在することを主張している⁹⁾。つまり、記号体系Iのもたらす意味は、表現面についても、内容面についても形式的であり、媒体の特性や、場Iの諸要因によってすら多様である(意味作用の方向が多様になる)ということを知っておくべきである。

2. 記号行動の三類型

人間の行動を「記号」の側面からみた場合は一般に記号行動と呼ばれる。北村によれば、それは三つの類型に分けられる。ひとつは日記などのように見聞き、感じたことを読み手などを考えずに、自分の情報を「記号」「メディア」によって表出するものである。これは「記号表出」と名付けられる。また、情報を記号化し、メディアで具体的な

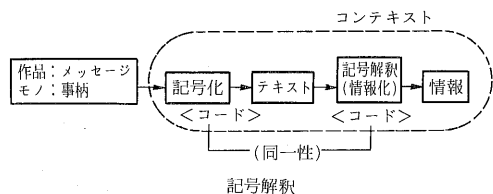
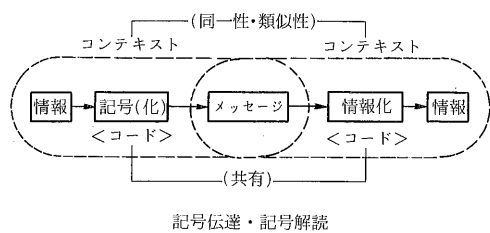
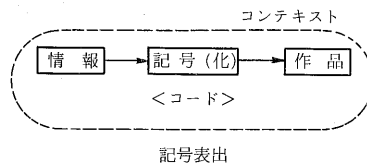


図4 北村の記号行動の三類型

ものにして、相手にその情報を伝えるのが記号伝達であり、そして伝えられた記号を解釈するのが記号解釈である（「記号伝達・記号解釈」）。さらに、ある対象物を自らのコンテキストと自らのコードで記号化し、情報化することを「記号解釈」という⁶⁾。(図4参照)つまり、対象物はこの場合、テキストになるわけである。

このような意味で、メディア・スポーツは「記号伝達・記号解釈」のためのメッセージ、あるいは「記号解釈」のためのテキストとして捉えられる。

IV メディア・スポーツの記号論的認識モデルとその適用

以上、メディア・スポーツを捉える際に基本となる記号論的前提について述べてきた。次に、議論を一步進めて、実際にメディア・スポーツを認識的・分析的過程でどのように考えることができるのか——私たちの最もよく接する新聞とテレビについて述べることにする。

新聞の記事及びテレビの番組を成立させている有意味単位（表現素）はあるシンタックスによってつなげられている。それらは、図5、図6に示したように様々である。そして、さらにシンタックスの構造を弛緩させ、記事や番組のテキスト性を保証し、表現性を強化し、読み手のコノテーションを拡大させる構文上の操作がある。これをレトリックと呼ぶ。このようなシンタックスとレトリックと様々なシチュエーションとの組み合わせでシークエンスが形成され、ディスクールを生成するのである。では、メディア・スポーツ全般に共通する記号論的分析法を、わが国の国技である大相撲に適用してみよう。

1. 新聞におけるスポーツ

ここでは、主にスポーツ新聞を対象にしてシンタックスのレベルから分析を進める。

紙面の形式を成り立たせている一般的な二大要因として写真（絵）と文字がある。大方のスポーツ新聞において両者の組合せのうちまず私達を捉えるのは文字の方であろう。スポーツ新聞の特徴のひとつとして着色された大みだしがあげられる。私達が店頭で、あるいは家で新聞を手にした時に最初に目がいくのはそこであり購買意欲もそこに

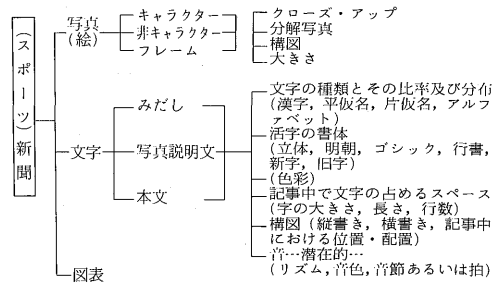


図5 (スポーツ)新聞におけるシンタックスレベルの表現素分類

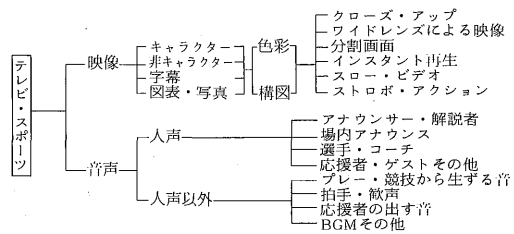


図6 テレビ・スポーツにおけるシンタックスレベルの表現素分類

影響される場合が多い。

記事1では大きなブルーで縦に「朝潮やったる」がまず目に入る。そして、それよりやや小さめの文字で横に書かれた「場所前にお見合」「それより初賜杯だ」「浪花の春オレのもんや」「グイグイ千代も「血祭り」」などのみだしと、「トドのつまりはV」「どうだ」などの写真説明が問題となる。このうち「朝潮」「初賜杯」にみられる立体文字は、ただ単に目立たせるだけでなく、朝潮の躍動感や力強さを醸し出している。スポーツ新聞では、みだし文字の大きさや種類が全体のディスクールに深く関与するのである。

また「浪花の春オレのもんや」という関西弁のカットは、朝潮の大きく口を開けた写真とまさに同時に私達の目に飛び込んでくる。つまり、その位置や配置も問題となる。

みだしの働きは、単に文字映像に留まらない。「音」も問題である。ただし、新聞であるので、これは潜在的なものである。朝潮が調子の波に乗って初優勝に邁進するイメージが、「グイグイ」「血祭り」「お見合」「初賜杯だ」「オレのもんや」などのイ音やア音の連続や、「グイグイ千代も血祭り」の4音節……3音節……4音節という歯切れの良さが言葉のデノテーション、コノテーションと結びついて、活発さや雄々しさとなっている。

つぎに、写真である。図5に示したようにその中には、キャラクター、非キャラクター、フレームが含まれる。この場合に中心となるのは、拡張されたセンテンスを形作り、ディスクールに關与的なキャラクターであることは言うまでもない。つまり、みだしや写真説明文などと連動し、その表情・動作・欲望などをより細かく分類されてしまうのである¹⁰⁾。

さて、次にレトリックのレベルではどうだろうか。渡部も指摘するようにスポーツ新聞で圧倒的に多いのは、「初賜杯だ」「どうだ」などの断定形、「トド」「ウルフ」「ほえた」などの隠喩、そして各種の語呂あわせがレトリックとして使用されることである¹²⁾。さらに、「V」「千代」「北天」などの短縮形もみだしではよく使用されるレトリックである。

また、重要なレトリック的操作は記事の物語構造を利用して行なわれる。物語構造のプロトタイプを、中山¹⁰⁾がチョムスキーやプレマスを参考にして作成した3つの一般命題に整理すると、図7に示すように、NP(名詞句)とVP(動詞句)になる。この図式がレトリックによってアレンジされ、ディスクールを形成する。

記事1でいえば命題(A)の対立は、千代の富士だけでなく、その他の対戦した力士が存在することが「千代も血祭り」というみだしに表われている。さらに、記事中の右上の表で千代の富士の

他、若島津、佐田の海が朝潮と対立的に存在することがコノートされ、(A)の命題が一層強調されている。

次に命題(B)は、写真やその説明文で近畿大相撲部がデノートされ、「浪花の春オレのもんや」、「大阪太郎2代目お任せ」というみだしで大阪のファンがコノートされている。さらに、父親の談話では、親方や来たべきフィアンセが(B)のVPとして表現されている。

さらに命題(C)では一目瞭然に賜杯の獲得(優勝する)がVP部を形成することがわかるが、それは彼にとって初めてであるということや、第二の故郷大阪でということが一層強化されている。また、「場所前にお見合…それより初賜杯だ」というみだしから、女性の獲得が優勝よりも価値の低いもの(少なくともこの時点では)であることがレトリックとして機能しているのである。

以上のようなシンタックスとレトリックから、どのような意味の世界が重層的に形成されてゆくのだろうか。

記事1には二つの写真が掲載されている。上の写真は、まず朝潮が大きく口をあけて何かを叫んでいる様子が一瞬のうちにみとれる。そしてそれは、水からはい出しながら、上半身だけ上方にそらした状態である。受け手は、これを見て、海から出てきた海獣(朝潮の場合は愛敬のある珍獣にもとれるが)がエネルギーを満載して、雄叫びを上げていることを想像させられる。そして、下の写真説明文でそれがトドであり、背景は母校である近畿大学のプールであることがわかる。つまり、今までの低迷から、まさしく「水を得た魚」ならぬ、「近大の水を得たトド」として躍進しようとする意気込みが伝わってくる。下の写真では朝潮があたかもボクシングという右ストレートを顔面にヒットさせたかのように右手を一直線にのばし、千代の富士が顔をそむけ、横向きになって「しまった」という様子で土俵を割った模様が写されている。そしてその力強さは、大みだしの「やったる」や「グイグイ」などというコピーと連動して一層増幅されるのである。つまり、写真をみる→みだしをみる→また写真をみる→みだしをみる・という円環現象を強要し、数々の意味を生起するのである。そこでは、先にあげたイ音とア音の連続(イ音は明るく、ア音は力強い)や3音節……4音節……3音節というリズム・一連の断

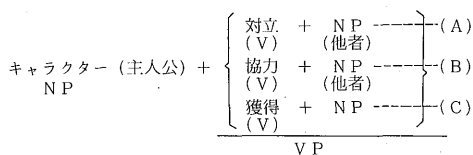


図7 物語構造のプロトタイプ

乎たる調子が、雄々しき、猛だけしき、攻撃性をデノートして、男らしさをコノートしている。相撲における成功（成就）は、一人前の男になる手段なのである。ここでは男は、それらを保持すべきなのであり、男らしき・女らしきのイデオロギーの伝達がなされている。

また、「やったる」「オレのもんや」等の関西弁は、リズムを生み出すだけでなく、「浪花の春」「大阪太郎」などと共にローカルなアイデンティティに訴えるものである。誰でも多かれ少なかれ、またそのレベルがナショナルなものであれ、ローカルなものであれ、地域的なアイデンティティを保持しているものである。つまり、ここでは、郷土愛に基づくアイデンティティが伝達される。

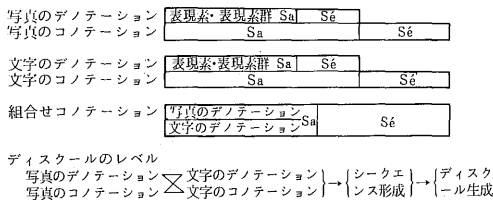


図8 (スポーツ)新聞における意味作用モデル

次に、「お見合……それより……初賜杯だ」は、暗に「家庭よりも仕事」という仕事の相対的重要性をコノートしている。また記事4に目を向けると、「千代V3」の上に婦人の顔写真と共に、「“勝つ力”は愛妻料理に……」というコピーがある。これらは、男は家庭のことより仕事に力を入れるべきで、その仕事は女のシャドウ・ワークに支えられるべきであるという共示であり、家父長制のイデオロギーの伝達といえるだろう。

さらに、記事2の「富士桜閣に恩返しを……」や記事3の「涙こらえきれぬ三保ケ関親方」は、たて社会の人間関係あるいは師弟愛をコノートする。記事2では、「いままでの公私にわたる指導、援助に対して、賜杯を獲得して、引退に花を添える」という劇的レトリックによって、また、記事3では、北の湖の引退したあと「消えかけた三保ケ関部屋の灯」とともすというレトリックで、一層ドラマチックにこの社会的価値は伝達される。

その他、相撲(全スポーツ競技にあてはまるが)それ自体の性質から生起する競争(差異)のイデオロギーが宿命的に伝達されることは他言を要しない。

以上述べたことを、先の記号論的前提を考慮に入れて重層的にモデル化したものが図8である。また、図9は記事1における意味作用を例示したものである。

2. テレビにおけるスポーツ

(1985年大相撲秋場所14日目のNHK放映を中心に)

テレビ・スポーツの特徴は、シンタックスレベルの表現素が、特定の規則性やリズムをもって表現されるわけではなく、通常、アモルフでモザイク的に現出することである。その際に様々なレトリックが使用されるのである。大相撲放映の構造は、日毎、取組毎に標準化されたパターンをもっていることは確かである。それは、カメラワーク、字幕スーパーの挿入方法、アナウンサーの語りにおける常套語句に端的に示されている。しかし、それらはさまざまなレトリック的操作で特別に意味づけされるものでもある。

そのひとつは、仕切りといわれるものである。大相撲は、それ自体仕切りと言われる儀礼があるが、テレビにもテーマ音楽やスタッフ等を示す字幕スーパー等の仕切りがある。人類学でいう聖化

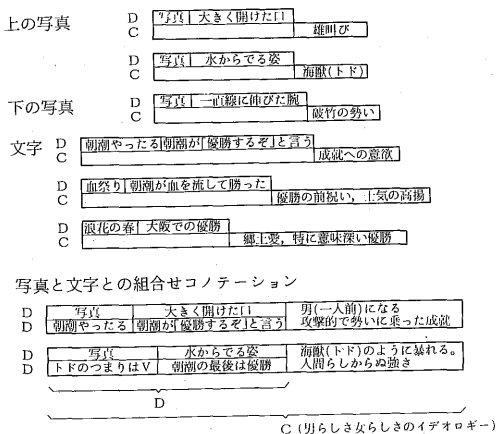


図9 記事1における意味作用例

された領域であることを示す境界の役割を果たすものである。相撲放送においても、番組始めの太鼓をはじめ、各取組の仕切りにおける毛筆調の字幕や過去一年間の対戦成績を示す表などがそれにあたる。それは、額縁のごとく、外を気づかせることで内の吸引力を増すレトリックである。

また、境界儀礼的な「回想」という手法もきまって使われる。アナウンサーは、取組毎に、決まって登場力士の先場所やその場所における成績や相撲内容について、あるいは対戦相手との過去の勝負などについてふり返る。最近では、前回の対戦をビデオ・テープで振り返ることも行なっている。このような境界儀礼（回想）は、先にあげた物語のプロトタイプの強化を捉す巧妙なレトリック的操作といえる。

さらに、物語のプロトタイプの補強の役割を演ずるレトリックは、その場所の終盤に来て多用される。秋場所14日目においては、まず、千代の富士の優勝のかかった大乃国との一番について中入の取組の前に両者の過去の対戦ビデオを見ながら振り返ったり、解説者やゲストの大鵬にこの一番の予想をさせたりしている。この一番の予想や期待は、途中の栃剣VS玉竜、二番前の若島津VS北天祐、直前の朝潮VS板井の仕切りの中にも、無秩序に挿入されている。また、千代の富士の好調の原因や体の状態、その日の表情など、賜杯を獲得しそうな力士については、密着取材や、詳細な情報伝達が行なわれ、物語をドラマチックにする演出を施している。

次に、アナウンサーと解説者またはゲストとの語り合いも重要である。大相撲の場合、この会話の7割以上が、アナウンサーが解説者に確認を求める形式、つまり「……ですね」や「……でしょう」であった。このような再三の確認に対して、解説者はほとんどの場合「そうですね……」とあいづちを打って否定しない。これは和合のレトリックであり、仲間のメタファーである。

最後に、最も重要なレトリカルな操作は、クローズ・アップであろう。大相撲の場合は特に、仕切りを重ねる毎に気合が入り、顔面が紅潮したり、ならみ合いが長く続いたりする。この様子は、クローズ・アップによる胸から上の映像によって表現される。視聴者はそれぞれ情緒的に自己同一視し、感情移入する（そこまですないまでも推量する）。どのような感情を移入するかは受け手にまか

せられる。これがテレビの最も大きな特徴であり、それはほとんどの場合、キャラクターのクローズ・アップによって成立する。

さて、では以上のようなシンタックスとレトリックから受け手に対して、どのような意味作用の方向が示されるだろうか。

まず、幕内力士土俵入りの際や各取組の仕切りの折に場内アナウンスされる出身地紹介は、その時の拍手や声援と共鳴して受け手の地域的アイデンティティにアピールするであろう。

また、力士の身体の体型や肉の色つやに関する映像や評価は、力強さ、美しさに関する受け手の様々な意味作用を喚起するにちがいない。この日は、千代の富士の土俵入りの模様をスローVTRで再現し、筋肉のはり具合について「すばらしい」「黒びかりしている」「巡業で相当稽古してきた証拠」などと評価をしていた。そこでは受け手は、「筋肉の力強さ」「ストイックな鍛練」についての重要性をコノートされる可能性が大きい。

さらに、相撲中継での慣用語の「よく辛抱した」や「相撲は最後まであきらめてはいけない」「じつとがまん」などは、わが国独特の「忍耐や根性」という価値を伝達している。

最後に、先にアナウンサーと解説者の会話は仲間のメタファーと述べたが、相撲の潜在的二元対立構造¹⁴⁾において、このように両者が和合的で統合的になるのは非常に皮肉ではあるが、それらは権力者への盲従や無批判性をコノートする可能性がある。

しかし、テレビにみる意味作用は、音声つまりアナウンサーや解説者の語りがなければ、その方向性はきわめて曖昧である。つまり冗舌で断定的な語りほど意味作用の方向が強制される。そして、あまりにも受け手の価値や要求と、かけ離れた語りはメタ言語的意味的意味作用を喚起し、不快・不評を招き、ついには音声を消して見るという事態も起るのである。

一方、クローズ・アップを中心とした映像は、主に受け手の情緒的あるいはカセクシ的側面にアピールし、それ由に、受け手の自己同一視の鍵を握っているものといえる。また、映像との意味作用には、それは必要不可欠のものといえるだろう。

V 結 語

以上のようなスポーツ新聞とテレビによる大相撲の記号論的分析からわかるように、スポーツ新聞で特筆すべきことは、大相撲の経過や結果を伝えるというよりも、そこから派生するそれ以外の何かを積極的にコノートする姿勢である。それらは、相撲が根源的に保持する「対立構造」や「獲得の過程」などを通じての、「男らしさ女らしさ」「地域的アイデンティティ」「家父長制」「たて社会」「師弟愛」「競争」などのわが国における支配的価値やイデオロギーであった。

一方、テレビでは、特に「音声」が「ストイックな鍛練」「地域的アイデンティティ」「忍耐・根性」「権力者への盲従」等の価値やイデオロギーのディスクールを形成すると考えられた。そして、中心となる映像の方は、受け手への強制的意味作用の度合は低いが、受け手自身で定義づけ(definition)を完了する必要性と可能性をもつものであった。その意味で、マクルーハンの「新聞はホットなメディア」「テレビはクールなメディア」という規定は当を得たものであった。したがって、テキストとしては、新聞の方がメッセージ性が強く、(換言すれば、記号解読的)、テレビにおけるスポーツは、よりテキスト的(記号解釈的)であるといえる。

本研究では、最初にあげた目的を達成するために、二つのメディアによるスポーツ(大相撲)をとりあげ、その構造と魅力(私たちが相撲にひきつけられるダイナミクス)と意味の解明を試みた。既存の意味システムの利用による相撲のディスクールの産出という方法論には言語行為論等からの批判も考えられるが、まずは、メディア・スポーツの意味生成過程と、そのイデオロギー的機能についての構造論的・記号論的分析を試みたのであった。

記号論は、最近によってようやく広く社会に知られるようになった。しかし、新しい科学が台頭する時の常として、既存の領域のエスタビリッシュメントや遅滞者(Laggard)からの誤解や批判はつきものである。ここでは、記号論の科学的根拠を詳述する余裕はなかったが、メディア・スポーツの理解に対して記号論的パースペクティブで新

風を吹き込むことができたと思う。そして、少なくとも、経験や直観に依存してきた認識過程に対して、マニュアル化・技術化を可能にし、数量的手法では分析できない質的問題に対して、解決法を示した。記号論的实践とは、究極的には、記号なる観念からの解放を目的とするものであろう。その第一段階として「構造=秩序」の生成の場に降り立って、上記のような支配的価値やイデオロギーを摘定したのである。

引用文 献

- 1) ロラン・バルト著、沢村昂一訳、記号学の原理、『零度のエクリチュール』所収 みすず書房、1978年 P.142
- 2) ロラン・バルト、上掲書、PP.195-201
- 3) 橋本純一、メディア・スポーツに関する研究 I——メディア・スポーツ研究の経緯と可能性——、第12回東京体育学会発表資料、1985年、(東京体育学研究13に投稿予定)
- 4) ルイス・イエラムスレウ著、林栄一訳述、言語理論序説、研究社、1971年、PP.16-79
- 5) 星野克美、セミオティック・マーケティング、日経広告研究所報98号、PP.1-2
- 6) 北村日出夫、テレビ・メディアの記号学、有信堂、1985年、PP.58-75
- 7) 丸山圭三郎、文化記号学の可能性、日本放送出版協会、1983年、PP.27
- 8) マーシャル・マクルーハン著、後藤・高儀共訳、人間拡張の原理、竹内書店新社1967年、PP.399-438
- 9) 中野収、マス・コミュニケーションと記号、川本茂雄他編『講座・記号論4、日常と行動の記号論』所収、勁草書房、PP.120-137
- 10) 中山一、マンガの記号学的分析、上掲書 PP.255-259
- 11) 下田直春、社会学的思考の基礎、新泉社1981年、PP.341-342
- 12) 渡部直美、捏造される後日譚、草野進編『プロ野球批評宣言』、冬樹社、1985年、P.152
- 13) ジュディス・ウィリアムソン著、山崎・三神共訳、広告の記号論、柘植書房、1985年、P.31
- 14) 山口昌男、相撲の宇宙論、ターナー、山口共編『見世物の人類学』所収、三省堂、1983年、PP.322-323

